

## 2 多様な文化を教師は どのようにとらえればよいか

ワシントン大学でチソンは大学院 松尾 知明

### ●チエックポイント●

- ① 多文化主義の理念が多文化共生をめざす教師の培うべき教育観の基礎となる。
- ② 国際化時代における教師の主要な課題は、自民族中心主義的な視野の克服にある。
- ③ 教師は、社会的公正の視点に立った多文化共生社会の構築という明確な目標をもたなければならぬ。

科学技術の発達により、情報、もの、人の国境を越えた相互交流は加速度的に進展している。その一方で、環境、安全保障、人口、人権など地球規模の問題は、国際間の協力なくしてはもはや対応することができなくなっている。このように地球レベルの相互交流や相互依存が進むなかで、異なる文化的な背景をもつ人々といかに共生していくかが緊急かつ重要な課題となっている。

しかしながら、日本においては、その民族構成や歴史の経緯から「単一民族」信仰が浸透し、同化主義のもと異質なものを排除していきこうとする傾向が強い。海外滞在後に帰国した子どもたちが直面した異文化利がしや、在日韓国・朝鮮人をはじめ在日外国人が経験してきた差別や偏見などは、その典型である。国際化・多文化化が国の内外で急速に進展している今日、学校教育においては、多様な民族や文化の理解を促すとともに、こうした日本人の自民族中心主義的な傾向をどう克服していくかが中心的な課題となる。

このような問題認識に立ち、小論では、アメリカ合衆国（以下、アメリカと略す）の「多文化教育」の議論を手がかりにしながら、多文化共生時代における教師の教育観について考察を深めたい。

### 1 教師の教育観と多文化主義

教師のもつ教育観は、教育実践を方向づける基礎となる。教師は、教育目標を立て、教材を選び、指導法を決め、子どもたちを指導・援助する。この継続的な意思決定プロセスに方向性を与えるのが、教師のもつ教育についての価値観、信念、態度である。多文化社会における教育のあり方を考えたとき、その教育観を形成する基本となる理念は、「多文化主義」あるいは「文化的多元主義」と呼ばれるものである。

これは、主流集団への同化主義に反対し、民族のあるいは文化的な多様性を尊重しながら「多様性のなかの統一」をめざそうとする理念である。そのメタフレーズとしてサラダボール、万華鏡、オーケストラなどがよく使われる。

たとえば、オーケストラでは、それぞれの楽器はそれぞれ独自の音色を奏でる。こうした異なる楽器の個性が一つになったとき、全体としてすばらしいハーモニーを創り出す。異なっていることはけっして否定的なことではなく、多様性があることでこそ、全体としてより豊かでダイナミックな音楽を生み出すことができるのである。このオーケストラに

表現される違いを認め尊重しようとする多文化主義の理念は、国際化・多文化時代に培うべき教師の主要な教育観であろう。

しかしながら、多文化主義といってもどのような多文化主義なのか。多文化主義のなかみを検討することから、多文化共生のための教育観に迫っていききたい。

### 2 カラーライオンと批判的多文化主義

最近ベストセラーとなった本に、「カラーライオン上の人生」と題する自伝がある。現オハイオ州立大学の法学部学部長であるワイリアムスは、如いとき白人として育てられる、白人だけの学校に通い、白人だけの映画館に行き、白人のためのプールで泳いでいた。それが、彼が10歳になった冬、インディアナ州の新しい家へ向かう途中、父親からある秘密を打ち明けられる。実は、彼は白人ではなく黒人である。この人生の分岐点を彼は次のように振り返る。

「24時間のうちに、私は白人であり、流行を追うヴァージニア州アレキサンドリヤで暮らすことから、黒人でありインディアナ州メソンの住宅プロジェクトに住むことになった。私の人種的なアイデンティティは、一夜にして変わってしまった」。

彼の生活は激変する。人種的な偏見や差別は、学校やコミュニティに満ちており、その日以来、黒人として厳しい差別と戦っていくこととなる。彼は、「(白人と黒人との間にあって)ライオンははつきりとしていて、それはたいていへんに厳格なライオンだった」と回想する<sup>1)</sup>。この自伝に象徴的にみられるように、多文化社会において主流集団に属していることとマイノリティ集団のメンバーであることは決定的に異なる。オーケストラを構成する楽器のように、各要素を対等なものとして仮定することはできないのである。このような集団間の権力構造を抜きにして多様な文化の理解や尊重のみを強調することは、結局、社会の差別構造を温存することにつながるのである。

近年、このような視点から、人種、性別、社会階級による多様性の現実を批判的にとらえ、より公正で平等な多文化社会のあり方をさぐる「批判的多文化主義 (critical multiculturalism)」という概念が使われ始めている。この概念の意味するものを「白人であること (whiteness)」の議論から次に考察したい。

### 3 白人であることの意味

今日の意味での「人種 (race)」という概念は、大航海時代まで遡る。植民地を拡大していくなかで、ヨーロッパの白人らは外見や行動様式の違いから異なる先住民と出会うことになる。この過程で、植民地支配を正統化するために、白人とは異なる「他者」をさす概念が必要になった。そこで「発見」されたのが、人種という概念である。

こうした他者の考察は、彼ら、彼女ら自身の「白人であること」を再定義することになった。その基本的な構造は、白人と非白人、西洋と非西洋、文明と野蛮、ノーブルと遠脱、支配と非支配、優秀と劣等などの二立相反のアイヌコースにみることができ。このような言葉の成り立ちから、白人であることは、たとえば次のような特徴をもつことになる<sup>2)</sup>。白人であることは、第一に、目に見えない文化的な標準を有することを意味する。何がノーブルであるのかは、白人のもつ価値観や基準によって決定される。主体である白人の日常的な生活や行為が自然で当たり前なことであり、マイノリティの文化は白人の基準と異なる特別でエキゾチックなものとしてとらえられる。

白人であることは、第二に、人種的な特徴をもつことを意味する。権力による強制というよりは、むしろ上に述べた目に見えない基準によって、白人のもつ価値、知識、生活様式はアメリカ社会のなかで正統化されていく。白人の常識が社会のなかで特権を形成していく。その一方で、「他者」であるマイノリティ

の片は常識に合わないものとして黙殺される傾向にある。

白人であることは、第三に、他者あるいは自分自身を認識する人種的なレンズをもつことを意味する。日常に潜む文化的な優位や特権を当然のこととする白人の意識は、アインライチについての理解をきわめて困難にする。この白人中心主義的なレンズを通してみると、アインライチの抱える貧困、学力不振、犯罪などの問題は彼女ら、彼ら自身の問題となり、白人の側にある人種的な差別構造にあるとはとらえられにくいのである。

白人であることとの議論から、多文化社会のなかで主流集団であることの一端が明確にされたと思う。問題を困難にしているのは、こうした白人の人種的なレンズや社会的な特権が潜在的に存在し、気づきにくい点にある。

批判的・多文化主義では、こうした隠れた多様な民族・文化集団の間の権力関係をも射程にたいし、すべての集団の音が穿しく公正に反映される多文化社会への変革を提唱する。白人教師の多いアメリカにおいては、このような立場にたち、教師の白人中心主義的なものの見方や考え方をいかに克服していくかが多文化の理解を促す鍵とされる。

では、この白人中心主義の克服という課題を次に検討しよう。

#### 4 白人中心主義の克服

「白人の特権——目に見えない背負い袋をアインバッキングする」という論文のなかで、アインバッキングとは、身の回りで日常的にみられる白人であることの特権を26リストラップしている。それらのいくつかは、次のよう

なものである<sup>1)</sup>。  
私が引つ越す必要があるとき、かなりの確信をもって住みたいと思う住宅を借りたり購入したりすることができ、テレビをつけたら、新聞の一面を上げたとき、私の人種の人々が多くの割合で登場しているのを見ることができ。

私の子どもたちが、自分自身の人種的な存在を取り扱ったカリキュラム教材を与えられているだろうかと思慮できる。

この白人の特権を掘り起こそうとするアインバッキングの試みは、教師のもつ白人中心主義の克服という課題に示唆を与えてくれる。「教師のもっている人種的な特権は、私たちの身の回りにおける空気に似ている。それは身近に存在するのだから、あまりに当たり前すぎてその存在に気づきにくい」。

彼女はこうした目に見えない背負い袋を意識し、その袋から白人である特権を一つひとつ取り出していくのである。それは反省的な思考を通して人種的なレンズを取り去っていく過程でもあるだろう。白人中心主義から自由になるためのこの作業を、彼女は次のように語る。

「私は書き留めてしまいうまでこのリストにある現実のそれぞれを繰り返した。私にとって白人の特権というものは免れやすい束の間の問題であると悟った。この現実から逃れたいという圧迫感は大さかった。というのは白人の特権に直面するとき、私はメリトクラシーの神話を捨てなければならなかったからである<sup>2)</sup>」。

彼女の言葉どおり、主流集団である特権を意識化させるという行為によって、自らの差別性に気づかされ、未だに残る社会的な差別構造に直面させられることはあまり快い経験ではないであろう。しかしながら、こうした自己内省の過程を通してはじめてアインライチやその文化についての理解が可能になり、多文化共生の道が開けるのではないだろうか。

#### 5 多文化共生社会の創造

多様な民族や文化を教師はどのようにとらえればよいのだろうか。教師のもつ価値観や教育観が多文化共生の教育を方向づけることを考えると、国際化・多文化化の進む今日、この問いは日本の教師にとってきわめて重要なものとなるに違いない。

小論で検討してきたアメリカの事例が示唆するように、これまでの国際化と教育の議論にみられる文化的多様性の現実を無批判に受け入れ、異なる民族や文化の理解と尊重のみを強調するアプローチには問題があるだろう。特定の社会のなかで主流集団の人種的な特権を考慮にいれず多文化理解を促す教育実践を試みれば、それは自分とは異なる「他者」について表面的な理解に陥ってしまうのである。

こうした他者理解は、旅行のときにエキゾチックな食べ物、衣装、生活様式に触れて、その民族や文化のすべてを理解できたと錯覚するのに似ている。このような旅行アプローチに陥らないためにも、多文化社会における権力関係の現実を直視し、どのような多文化主義をめざしていくのかを追求していかなければならない。そのためにはまず、「白人であること」を脱構築しようとするアインバッキングの試みのように、教師一人ひとりが「日本人であること」(japaneseness)はどういうことなのかを真剣に内省することから始めなければならないであろう。

日本という多文化社会のなかで、日本人はどのような特権のつまったアインバッキングを背負っているのか。地球という多文化社会のなかではどうか。たまねぎの皮を一枚一枚めくっていくように、日本人であるという意味を一つひとつ探求していかなければならない。このような教師自身の自民族中心主義の克服を通して、はじめて異なる民族や文化の理解が深まっていくのであろう。

さらに、教師は、多文化共生社会を創造しつ必要があるだろう。上に述べた過程を通して「日本人であること」の意味を再認識し、異民族・異文化の共感的な理解が進んだとき、教師は必ず矛盾を抱える多文化社会の現実と直面するはずである。多文化の共存・共生を可能にしていくためには、こうした権力関係に起因する矛盾を直視し、社会的公正の視点からすべての民族あるいは文化集団のアイ

ンライチが等しく最大限に発揮できる多文化社会を築いていく必要があるのである。国際化・多文化化が進みますます進行するに違いない21世紀を念頭においたとき、教師の培うべき教育観は、こうした公正で平等な多文化共生社会の形成に主体的にかかわることのできる子どもたちを育成するのだという確固とした信念にあるのではないだろうか。

(注)

(1) G.H. Williams. (1995) *Life on the color line: The true story of a white boy who discovered he was black*. New York: Plume. なお、引用は、L. Weaver. (1995) "Color blind." *Ohio Quest* (White) に掲載されている筆者へのインタビューの一部を訳したものである。

(2) 「白人であること (whiteness)」については、例えば、R. Frankenberg. (1993) *White women, race matters: The social construction of whiteness*. Minneapolis: University of Minnesota Press. を参照のこと。

(3) P. McIntosh. (1989) "White privilege: Unpacking the invisible knapsack." *Peace and Freedom* (July-August) pp. 10-11.

(4) *Ibid.* p. 10.

#### 解説キーワード

●多文化教育  
多文化教育は、アインライチの視点にたち、社会的公正の立場から多文化社会における多様な民族あるいは文化集団の共存・共生をめざす教育理念であり、また、その実現に向けた教育実践でもある。1960年代から1970年代のアメリカ合衆国で展開した民族の台頭や公民権運動を背景に生まれた多文化教育は、同化主義に対するアインバッキングとしての「文化的多元主義」あるいは「多文化主義」に理論的な基礎を置き、それぞれの民族や文化の理解や尊重を通して「多様性のなかの統一」をめざす。これまでの多文化教育の取り組みが社会的な差別構造の克服には必ずしも真誠してこなかったとの反省から、最近では、主流集団とアインライチ集団の権力関係を批判的に捉え、より平等で公正な多文化社会への変革を提唱する「批判的多文化主義」の議論がさかんに広がっている。